

# 自学・自主研究部会

部会長：附属中学校 木村真冬  
部会員：附属中学校 木村真冬・森祐樹  
附属高等学校 沼畑早苗

2025 年度活動報告：

- 文部科学省研究開発学校としての中高の実践について情報交換を行った。  
附属中学校：「各教科の学習言語を意図的に指導することで生徒の深い理解を促し、各教科を超えた学習語彙の活用を支援する」研究一年次  
附属高等学校：スーパーサイエンスハイスクール（SSH）「科学の力で未来を共創する女性リーダー育成カリキュラムの実践」第Ⅱ期第二年次
- 授業の参観などを通して、互いの探究的な学習活動のあり方について相互理解につとめている。
  - ・附属高等学校公開研究会（「日本史探究」「体育」）参観・研究協議への参加。（6 月）
  - ・附属中学校自主研究講堂発表会参観（台風により延期）（9 月）
- 附属中学校第 1 学年研究授業（2 月）  
研究活動に用いる学習語彙（課題生成型・仮説生成型・開発創造型、仮説、根拠など）に焦点をあてて自主研究の基礎ゼミをふりかえり、生成 AI のコメントも参考にしながら、夏休みに行ったミニ自主研究をより研究的なものとしていくための課題を検討した。
- 附属高校生「日本の教育現場における震災学習のあり方」について、附属中学校教員へのインタビュー・対話（3 月）  
福島 FW に参加した高校生 2 年生 5 名は、事後学習として、「『次に生かすこと』『日本人として、被害に遭われた方々を弔う気持ちを忘れないこと』『終わっていない課題を知ること』』といった震災学習の意義を踏まえたうえで、全員が総合的に震災に関する知識を得ることができる“バランスの取れた震災学習”」を検討しており、以下の点について中学教員へのインタビューを行った。
  - ・震災学習の意義について、どのように考えているか
  - ・現在行っている震災学習とその意図
  - ・いわゆる多感な時期とも言える中学生に、何をどこまで伝えてよいのか、また伝えるべきなのかそして、中学教員 3 名、高校教員 1 名を交えてのディスカッションへと発展した。何を学ぶ必要があるか、小学校から高校までを見通した学習として必要なことは何かを

教員自身も深く考えさせられる機会となった。

高校生のうち数名は附属中学校出身であり、コロナ明けにやっと実施できた東北修学旅行震災学習にて気仙沼・大船渡の方々との交流を経験している。その生徒たちが、他中学からの生徒たちと刺激を受け合いながら、附属高校にて福島原発事故に向き合う機会を得て、自分自身から沸き上がった疑問をもとに探究的な学習に熱心に取り組んでいる姿に接することができて、中学校教員としては非常に感慨深かった。

○3月高校生の課題研究発表会に中学生の希望者が参加させていただいた。中学生が高校生に学ぶ、小学生が中学生に学ぶという異学年・異校種の学び合いの場面をさらに増やしていくことがのぞまれる。

中高の連続性や発達段階に応じた目標・学習支援 などについても考察する機会となっており、今後の研究開発にも活かしていきたいと考えている。

★2026年度から、「自学・自主研究・課題研究部会」と名称変更する。